

“広く浅く”ではなく“広く深く”音楽を突き詰める

生粋の音楽好きが集うだけあって、嗜好する音楽にも皆が一家言あり。ギター・ベースの三浦さんは、1960年代の音楽が好きだと言います。「この時代のファンクやソウルといった音楽にはグルーヴ、独特のノリがあるんです。グルーヴは譜面に書いていないから、楽曲を聴き込んで音の長さやアクセントを理解して初めて表現できる。バンドメンバーと息が合っているのも重要です。パチェラーセブンのメンバーとは、そのグルーヴを共有して演奏できるから楽しいですね」。

幼少からクラシックピアノを続けているという松野さんは、

ジャズピアノにも興味津々。「上原ひろみさんのピアノが大好きでよく聴いています。難しいけれど、いずれ楽曲に挑戦したい」と話せば、先輩の手塚さんは「ぜひ挑戦してほしい。私は卒業してしまうけれど、OGとしてライブを観に行く日を楽しみにしています」とエールを贈ります。ちなみにOBの中には、音楽に関係する職に就いた人も各世代にいたとのこと。以前はギター製作に携わっているOBの方が、楽器のメンテナンスをしに来てくれたこともあったのだそう。世代を超えた繋がりも、パチェラーセブンの魅力といえそうです。

音楽を愛する仲間と出会えたパチェラーセブンは、“宝”

6つの軽音楽サークルでその演奏を競う「バンドフェスティバル」には、2バンド体制で参加。双方のバンドに参加した三浦さんは、夏休みもほぼ毎日18号館へ足を運んで猛練習したとか。「片方のバンドではインスト楽曲を3曲演奏し、ジャズセッションもしました。もう片方はロックバンドで、イギリスのバンド、ディープパープルの楽曲などを演奏しました。好きにやらせて貰えたので楽しかったです」。本学「世田谷祭」のライブには手塚さんも参加。「4年生にして初めて経験する学祭ライブでした。1年生からずっと開催できなかったため、やっと出られたという思いもあり、感動もひとしおでした」。

今後挑戦したいこともたくさんある部長の中野さんは、「管楽器を演奏できるメンバーがいるのですが、経験者をもっと呼び込んでビッグバンドを組みたい。ジャズ研として生まれた

サークルの伝統を深化させていきたいです」と、その夢を語ります。「新入生のときに初めて演奏した楽曲を、卒業ライブでも演奏したい。当時よりはきっと上手になっていると思うので、成長を見るのが楽しみです」と声を弾ませるのは、前部長の手塚さん。インタビュー全体を通じて、皆が音楽を心の底から楽しんでいる様子が伝わってきました。

「高校時代は音楽の話で共有できる仲間が周りにいなくて、想いを溜め込んできました。でもここにいるメンバーは、何かを問いただければ必ず何かを返してくれる。とにかく音楽が好きという点で、皆が繋がっている。最高の仲間に出会えたパチェラーセブンは宝です」と話してくれたのは部長の中野さん。音楽を愛する後輩たちへぜひ“宝”を繋げてください。



「世田谷祭」では、世田谷キャンパス1号館地下でライブを披露しました。

左はその際の集合写真。
「時間によってはお客さんも結構見てくれたので嬉しかった」と手塚さん。